

震災後の子どもたち (14)

結 実



森末 哲朗

早いもので、あの大地震を経験してもう二年が経とうとしている（96・11月現在）。

いまもなお四方人もの人達が仮設住宅での暮らしを余儀なくされていることを思えば、丸一年経って新しい建物でニュー・どんぐりクラブをスタートさせることができたことは、ある意味では幸運なことだったのかもしれない。

阪急六甲駅近くにあるどんぐりクラブの周辺は、今もなお地震の爪痕が生々しく残されている。

六甲小学校の校門の向かいにあった文房具屋さんはひどく壊れてしまい、どこでも学校のすぐそばには必ずあるはずの文房具屋というものが無い状態が永く続いている。

ぼくがよく子どもにおつかいを頼んでいた角のタバコ屋は、地震当日から数えて一年半も経った今年の夏家を取り壊し、現在工事中である。

八幡神社の近くにあったうどん屋さんには商売がえをして、夫婦住みこみで遠くの会社寮の管理人になった。

駅の南にあった居酒屋の主人は、地震当日、東灘区にある自宅で火にまかれて焼死。つぎだしの美味しい店だったが、いまはそれを作ってくれる主はいない。

どんぐりの裏手にゆったりとした一軒家が二つ並んでいたが、二軒とも全壊し、一軒は元の家族が建て直してそのまま住んでいるが、もう一軒はワンルーム・マンションに改築され、元の住人は六甲アイランドへ越して行った。

つらい話、悲しい話にはこと欠かない毎日が延々と続いて来、そして現在もなお続いている神戸。

それでも、キャンプ

95年の二月一日が「臨時どんぐり」再会の日だった。地震から二週間後のことである。

一週間もしないうちに半分以上の子どもは「臨時どんぐり」に戻ってきた。

どんな顔をしてやって来るだろうかと、不安な気持ちで彼らを迎えたが、どの子もいつもと変わりが無い。安堵感と拍子抜けした気分とが同時に湧いてきたことを覚えていた。

本当に普段と変わらない筈はないのだが、ぼくの眼にそう映っただけでも救われる思いがしたものだ。

その彼らが真っ先にぼくに訊ねてきたことは、「おっちゃん、キャンプ、できる？」だった。

ライフラインの電気だけは通っていたが、水もガスも止まったまま。学校はいつ再開されるのか、全く見通しがたっていない。何より肝心のど

んぐり自体が、これからどう漂流していくのかさえ見えていない時だった。

村上指導員の家を三月末まで解放してもらった。そこを臨時どんぐりにさせてもらうことになった。とはいえ、四月からどうなるのか誰にも何にも分からない、そんな時だった。

「よう、そんなこと言うとなあ。事態がまるで解ってないんちゃうか」、そんなことをまず思ったのだが、いま考えれば彼らは彼らなりに事態が解っていたのかもしれない。

先の事を考えるのがとても億劫で、半年も先の八月のキャンプのことなどとても考える余裕がなかったほかに、「ぜったい、やれ」と、尻を叩いてくれていたのかもしれないからだ。

テント発、キャンプ

95年の三月二十七日から、灘区内の都賀川公園で「テント学童クラブ」を始めることになった。

ある意味では毎日がキャンプ生活のようなものだったから、「キャンプ中にキャンプに行く」ような気がしたものだが、子どもたちの強い希望で本場に七泊八日のキャンプが実現することになった。

神戸から車で約二時間半の距離にある大屋町の「おおやすスキー場」が目的地だ。もう八回目ということもあって、すっかり顔馴染になったスキー場の皆さんは、我々を本場に暖かく歓迎してくれた。大屋町の自然もまた「地震のことなんか忘れて、思う存分楽しんで下さい」と、語りかけてくれているようだった。

どんぐり史上最少の人数で迎えた八度目の長期キャンプの一行の中に、青木悠一郎という二年生も「お客さん」として混じっていた。

三重県の桑名市に彼は住んでいて、どんぐりの二年生Ⅱ石川奈実子のいここにあたる子だ。

日常の中の付き合いは全くない子だが、どん

ぐりのキャンプに参加させたいという話を受け、人数が少ないということもあったので「よかったらどうぞ」という運びになった訳だ。

ナタで指を切ってしまった

キャンプ中の〈衣〉〈食〉〈住〉は、可能な限り子どもたちに担わせるという目標でやっていて、三度の飯、洗濯、掃除は全て彼らまかせにしている。

もしもごはんを炊き損ねたら、おとなの我々も喰えないということになるので、周囲の期待も大きいし、その分子どもたちの張り切りようも特別のものがある。ぼくは、見事に飯を炊きあげた時の子どもの、あの誇らしい顔を見るのが大好きだ。

三人がカマド係に選ばれ、それぞれ一升釜で米を炊く。いつの間にか子どもたちは、カマド係のことを「師匠」と呼ぶようになり、マキ割り係の

ことを「弟子」と呼ぶようになった。マッチひとつすることができない一年生から見れば、米を研ぎ、火を起こし、炊け具合を見ながら火加減をし、きれいに炊きあげる高学年の師匠達は尊敬的だ。

青木悠一郎は、弟子の仲間入をすることになった。

大きな丸太をノコギリで挽いたり、挽いた薪をナタで割ったりするのが弟子の主な仕事で、それはそれで重要な仕事なのだ。

その最中、しかも初日、悠一郎はナタで左手の人さし指をザクッと切ってしまった。

傷は骨まで達していたようだった。急遽、車を走らせ、小一時間かけて八鹿病院に運ぶことになった。幸い、骨を切断してはいなかったが、神経が元通りつながるかどうかが心配ということだった。

どんぐりに毎日来ている子には、小さな庭だけ

れどそこでナタの使い方を教えている。だからキャンプ地では殊更にナタやノコギリについては教えたりしないでやってきたが、特別参加の子にはそれなりの対応が必要だったのだ。そこがすっかり抜けてしまつて大きな怪我をさせてしまい、ぼくとしては申し訳ない思いで一杯になつてしまつた。

初日は傷の縫合、翌日からガーゼ交換などがあり、悠一郎にとっては毎日一度の病院通いが日課になつてしまつた。群れから外れて、運転手役の横山さん以外に誰もいない車中は退屈でもあり、心細くもあつたようだ。

「誰か、ついてきてほしいな」と、悠一郎。「よし、おれがいったら」と、名乗りをあげたのは当時三年生のさとし。仲間と一緒にワイワイやつている方が楽しいに決まつているが、さとしは悠一郎のエスコート役を買つて了。途中で「誰か、今日ぐらいは、かわつてよ」とも言わず、一週

間、毎日毎日長いドライブに付き合つてやつた。悠一郎も一つ歳上のお兄ちゃんこの親切には感じ入つたのだろう、「さとし君、さとし君」と慕うようになっていった。

キャンプに同行していたおとなたちは「さとし君で、すごい子やね」と、いつもはぶざけてばかりのさとしを見直したようだった。

ぼくも心底すごいやつやなと思つた。

本当に痛いのは肉体を受けたダメージだけではなく、そのことのために皆からとり残されることだ。転んだ子がいたとして、その子を置き去りにする集団だったら、転んだ子は物理的な痛みと、孤立感という心の痛みとを二重に味わわなくてはならない。「だいじょうぶか」と、手を差しのべてくれる子がいれば、残るのは転んだ痛みだけ。

悠一郎が「もう、桑名に帰る」と言わずに、包帯を巻いた手で八日間のキャンプを最後まで通せたのは、ひとつにはさとしのかいがいしい兄貴ぶ



りがあったことだったし、付け加えれば、他の子たちのさりげない思いやりだった。両手を使わな

◀ 95年8月 包帯姿で昼食をとっている悠一郎



ければ出来ないことが日常の中にはいくらもあるのだが、「その袋、かしてみい」と、彼から袋をとりあげ、破いてから中味を彼に渡すというようなことを、ごく自然にやってのけていた。

96年のキャンプで

悠一郎の傷は長い期間の中で癒え、心配していた神経の方も無事に通うようになったことを、キャンプの後、手紙で知った。

それから一年が経ち、96年のキャンプを迎えることになった。

「悠一郎、くるかな？」と、さとしたちは気に掛けていた。

「もう、こりこり」と思っているかもしれないし、子どもが「行く」と言っても、「危いから、やめときなさい」と親が否定すれば、小学三年生とおとなとの力関係では大概の場合、子どもが負ける。どんぐりの子は彼らなりに、ぼくはぼくな

りに気に掛かっていたが、悠一郎は参加するとい
う知らせが届いた。

「よう、来る気になった」と、彼に拍手を送りた
い気持ちと、「よくぞ、来させて下さった」と、
彼の両親には頭を下げたい思いが同時に湧いてき
たことを覚えていた。

96年はテントからではなく、新居のどんぐりか
らの出発になった。

彼の仕事は今年も「弟子」ということになった
が、さりげなく見ていると、ナタには手を出そう
としない。

一度だけ「やってみるか」と、促してみた
ら「いい」と、拒絶が返ってきた。やはり前年の恐
怖が残っているのだろう。

一日、二日と日が過ぎてゆき、八日間のキャン
プも残すところ三日というところまで来てしまっ
た。

どうやら、ナタを使うという宿題は来年に持ち

越されそうだなと思いはじめた六日目、悠一郎はそ
の夜の日記に「ぼくは、今日、カマを使ったよ」
と書いていた。

子どもたちを寢床に就かせてからのおとなの
ミーティングの際に、彼はどうやら挑戦する気持
ちを捨てていないようだ、ナタは恐れけれどカマ
なら使ってみようと勇気を出したようだ、という
ような報告をした。

子どもの親や大学生や常連たちで編成されたス
タッフたちは、大いに喜んでくれた。

とりわけ、悠一郎の怪我を一番近いところで目
撃してしまった大学生の逸見君は、「よかったー」
と、胸をなでおろしていた。というのも、「ぼく
がそばにいなから」と、誰よりも大きな後悔を、
彼はしていたからだ。

毎日の病院通いに運転手として付き合ってくれ
た横山さんも、「そうか……」と、ニンマリして
いた。

ついに、ナタを握った

「朝、悠一郎がナタをさわって
いました。それを見てよっしー
(よしひろ)が、『そうとちが
う』と教えはじめ、次にさとし
も教えてくれて、細いのを割っ
ているところにへんちゃん(逸
見君)が来て、本格的に教えて
もらい、いっしょうけんめい
やっています。横山さんも
『悠一郎、やっとするのか』と見

ていて下さり、多くの人と喜びを共有できてうれ
しかった」

これは毎夜スタッフに書いてもらう日誌の一文
で、悠一郎の伯母にあたる石川照子さん(どんぐ
りの現三年生「奈実子の母」が「カマ」の翌日に
書いたものだ。



▲96年8月 マキ割りをしている悠一郎

一人一人の子どもに、それぞれの課題があり、
それを避けているのか、くぐりぬげようとしてい
るのか、毎夜のミーティングで話し合ってきたこ
とが、ものの見事に結実した。

もしも悠一郎の前年の怪我のことも知らず、こ
のキャンプ中での彼の迷いやためらいも想像が、つ

かなければ、この光景は単に三年生の男の子が薪を割っていただけの風景に映ったことだろう。

眼に映る現象の内側にある心の動き、これが見えてこそ「子どもと関わった」と言うことができのだろう。その意味ではこの石川さん、横山さん、逸見君、見事に悠一郎と関わり、残すところあと一日となったキャンプの最終日に果敢に自分への挑戦を果たした彼の姿を見て、嬉し涙がこぼれそうだったことだろう。

蕾がパッと開いて花になる瞬間を目撃する人間は少ない。

それを目撃できた人、目撃した人から話を聞くことができた我々は幸せ者だ。

*

巷では「震後」が笑いや涙を包みながら進行している。

ぼく個人のことになるが、職場であるどんぐり

が全壊、近くの両親のアパートが全壊、自宅は半壊と、ぼくの抱えていた総てのものが被災した。

それぞれがようやく立ち直るのにたっぶり一年はかかったが、親父は「壊れていく」一方で、今年の四月に九十一でこの世を去った。痴呆が加速していく中で。

重い時が流れていったのだ。心はいつも灰色だった。

でもそんな中で、「おっちゃん、キャンプ、できる？」と、青い空に向かって走ろうとする子どもたちがいた。はっと気がつくぼくは、「そりゃそうや。空は灰色より青い色がええに気まっつる」と、ひとり納得する。

来年はこっちから子どもたちに訊いてみようか。「ことしも、キャンプ、できる？」と。

(六甲学童保育所どんぐりクラブ指導員)